

# 國學院大學學術情報リポジトリ

〔書評〕 伊藤龍平著 『ヌシ 神か妖怪か』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齊藤, 純, Saito, Jun メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000715">https://doi.org/10.57529/00000715</a>

紹介

伊藤龍平著

『ヌシ 神か妖怪か』

齊藤純

我が国の民間信仰や説話に登場する、神のような妖怪のような土地の支配者である「ヌシ」。これを正面から扱った、おそらく初めての書物である。本書によれば、ヌシは古代の国津神の末裔とおぼしき存在で、次の特徴がある。

- ①ひとつ所に長く棲む。
- ②棲みかである場所が淀んでいる。
- ③その場所から離れようとしない。
- ④身体的な特徴を持つ。
- ⑤尋常ならざる能力を持つ。

これらの特徴が、博搜された資料をもとに説明される。従来、民俗学等の専門事典でヌシを立項するものはほとんどなかったが、国語辞典の語釈と比べると、②の指摘は本書の独創である。それに触発されて考えるに、この「淀み」はヌシ世界が人間界から隠れていること、また、その世界の時の流れが緩慢なこと、の表れではないか—たとえば水の底の竜宮のように。ヌシが地下水脈を往来しているという伝承も、大地の下の水界の信仰や

説話的観念を思わせよう。

本書が掲げるヌシ研究の意義は二つ。一つは、ヌシは人間が自然界に対峙する作法を語った概念であり、自然との共生のヒントになること。もう一つは、興味深いことに、ヌシは日本特有の思想らしいこと。後者は、「ヌシ」の的確な訳語がなかったという、著者の台湾での教員経験に根差した洞察である。逆に、我々にとってヌシはあまりに当然すぎ、かえって検討を怠っていたことに気づかされる。

本書は、ヌシの概念が近現代の文学やアニメ・特撮作品にまで及んでいることを説く。手前味噌になるが、私も映画『キング・コング』の一九三三年日本公開当時の広告で、コングが「ぬし」と表現されている例を指摘したことがあった（「妖怪と怪獣」常光徹編『妖怪変化』）。が、うかつにも、そこで説明を止めていた。むしろ追及すべきはその先の問題であり、ヌシとは何かであったのである。

本書の巻末には詳しい参考文献が掲げられ、地域別のヌシ索引も備わる。日本の伝統的自然観を解明する、あらたな鍵であるヌシ。その研究序説となる論考である。

(四六判、二七〇頁、笠間書院、二〇二一年八月、

定価一六〇〇円+税)